

変な夢

ひゅう

病院

ぼくはとつぜん病院の一室にたっていた。白衣を着て。

そこは動物病院らしく犬がやってくる。飼い主はどこにもいなかった。犬が自分の意志でやってくるようだった。主治医のお姉さんと助手の若い男が、暴れないように犬を押さえつけて注射で採血した。

場面が変わり、MacBookと楽器を持ち出して、犬のために歌を即興でつくっていた。クラムボンのLongSongのようなホワホワした音楽だった。その歌を聞いた犬がうれしさのあまり泣いていた。ミニチュアダックスの茶色いお目めがくりくりしたやつだった。ぼくもその歌に感動して泣いた。

休憩時間になってお姉さんと今後について話し合った。

ぼくはなにをしたらいんですか。

そうね、とりあえずは現場をみてもらえればいから、手伝ってほしいときはいうし、うん、いまのかんじていいよ。

ぼくはお姉さんのことが好きなようだった。仕事ができ、優しく、すてきなおねえさん。

眼鏡で、すらっとした首筋ときれいな足と、ちょっとくたびれた白衣。それを直視なんてできなかった。

休憩が終わると次は車でかけた。お姉さんは運転がへたくそだった。突っ込んできた左折車のことをおかまいなしに前進する。

ぶつかったらあっちがわるいのよ。

ぼくらは、砂漠についた。そこにはいつものぼっているらしい木があり、大学の頃の先輩がなぜか車から突然おりて（乗っているのを確認していない）そこまで走る。途中小学生がスタートダッシュの競争をしており、それを超えてその木にたどり着いた。ぼくは怖くてのぼれなかった。よく見ると蛾とか蠅とか蚊とか、いろんなものが木の周りを飛んで、大変だった。先輩はここをこうやってのぼればいいのだと解釈して、さくさくのぼり、虫も気にせず上までたどり着いた。そこで鉄棒の前回りをやってのけ、ぶら下がり体勢のまま落ちた。

木を登る先輩を見送りながらまた車で病院に戻り、今度は待合室で待機している犬をいきなり注射した。タオルが真っ赤になり、助手が「これ、薄くないですか」とお姉さんに尋ねる。お姉さんは、たしかに、とだけ短く言うと、注射の針を眺めていた。ぼくはなにがなんだかわからないのでとりあえずこのタオルどうしたらいいですかとお姉さんに聞く。お姉さんは指差してこちらへんでいいよという。

タオルを触るとびしょびしょで赤い血と消毒の透明な水分で水滴がたらたらと落ちた。ぼくはそれを所定の場所においた。他のタオルがどれくらいぬれているかを確認したが、どれもこのタオルより乾いていた。注射針もお姉さんにしまう場所をたずねたが、お姉さんが教えてくれたのは新品を扱うトレイだった。ぼくはよくわからないまま受付に針を返した。

恐怖

車で移動していた。

たぶん、だれかの車。ぼくは運転していない。

夢独特の、だれだかわからない人たちに囲まれた霧囲気。

それに、知人で面識のないはずの人たちも乗り込んでいる。

ちょっと大きめの口ケバスみたいなやつだ。

広い片側4車線もある国道はずっと上り坂になっていて、どこかを目指している。

会話がはずんでいるのだが、みんな何を話しているかわからない。

坂道をのぼりきると、突然、景色がひらける。

「おおお」みんなの歓声があがる。ぼくもみんなの視線の方を見る。

ぼくは目を疑った。

道路の向こうは、砂でできた建築物しかなかった。

しかも奇妙な形をしていた。すべてピラミッドのような四角錐になっていて、てっぺんが平に削り取られ、その小さな面積のてっぺんだけ緑色なのだ。

それがいくつもいくつも横にも奥にもならんでいて、陽炎がゆらゆらとゆらいでいた。

だれも、気持ち悪がらない。驚いて喜んでいる。

ぼくにはとても気持ち悪く見えた。国道のそばにこんなものがある。ここはどこだ？

しばらくその風景を見たあと、ぼくらは「仕事」をするために樹木がたくさんある場所へ移動した。

移動も夢の中は一瞬だ。

仕事の内容は、樹木に吸い付いている羽虫を駆除すること。

見本をみせてもらう。黒くて手のひらくらいの大きさの蟻に似た形をした虫。透明の羽が生えている。

桜のような広葉樹に吸い付いている。枝の先の方を注意深く見るととまっている。

それを新聞紙をまるめたもので思い切り殴る。駆除の仕方はこれだけだ。

延々と続ける。

気がついたら、先ほど車に乗っていた仲間は誰一人いない。

ぼく一人で虫を駆除している。

虫の駆除の仕方がうまくいかず、頭だけ残るものや、腕だけ残るものなど、見た目がかなりグロテスクで、途中で嫌気がさすが、なにか使命を感じ、ぼくはひたすら虫を新聞紙で殴り続けた。

女の子がさらわれた。ぼくの知らない女の子らしい。だけど夢の中だと知っていたりする。不思議な関係だ。女の子を助けようとしている。誰にさらわれたかという、ヤクザだ。本当のヤクザかどうか知らないが、とにかくヤクザっぽいリーゼントとサングラスと派手なシャツのやつらにさらわれた。彼らの車はアメリカ製のひらべったくてやたらに長い外車だった。水色のボディだ。エンジン音もうるさいのに、さらに音楽もうるさい。ロックンロールを流している。それが駐車場に止まっているのだ。彼らが乗り込んでいて、後部座席にさらわれた女の子がいるらしい。

ぼくはそのなかで何をしているのか。そう、車を探していた。ヤクザから逃げなくてはいけないのだ。

夢から覚めたあとで気がついたが、ここに矛盾がある。女の子を助けようとしているのに、ヤクザから逃げようともしている。どういうことだろう。

とにかくぼくは、ヤクザの車の前に止まっている、おなじようなオープンカーに乗り込む。夢だと都合よくそんな車の鍵も持っていたり、運転だって、熟練しているかのようにすいすい動く。

ぼくが車を発進させると、ヤクザたちも追って来た。なんだろうこの出来レースは。まるでゲームみたいに、ちゃんと待っていて、ぼくが車を動かさない限りゲームが始まらないらしい。

しかも、車を走らせ、町中をすごいスピードで駆け巡ろうとしていると、後ろからも横からも、前からも救急車が走ってきて、ぼくの走行の邪魔をする。それらを綺麗によけるぼく。踏切もあったが、ぼくがクラクションをならすと遮断機があがった。どういう権限なのだろう。

逃げ続けていたら、いつのまにかぼくの車には人質の女の子が乗り込んでいて、しきりに何か話している。

「降りた方が懸命よ」

懸命、そんな言葉を日常でつかうだろうか。一生懸命とかくらいではないか？

いいつけ通りぼくと女の子は車から降りた。ヤクザはいなくなっている。

そしてなぜかぼくの女の子はラブラブなかんじでそれぞれ自転車に乗っていた。

ぶつかりそうになったら「この一」とか言ってやりかえしたりして、なんか恥ずかしい展開。

しかも、女の子は歌を唄っていた。オリジナルソングらしい。

自転車、自転車。

そんなことを繰り返す歌。メロディがかわいい。大塚愛あたりが歌えば売れそう。

で、夢はそこで終わってしまう。

高校らしい教室に職場の後輩（大学生）がいた。

本を広げていて、なにやら戯曲らしい。ぼくはそれをちらりとみて話しかける。

そうすると、その戯曲は出し物でつかうということが分かった。

iPod touchを後輩は持っていて、ぼくはiPhoneを持っている。

ぼくはそこまで話を聞くと、帰ろうとした。

荷物をポケットにいれたり鞆にいれたりする。iPhoneもポケットに入れる。

教室から出ると無性に美術室へいきたくなった。

階段を降りながらここは四階であることを確認する。

美術室は二階の渡り廊下を越えた先の奥の方にあった。

でもそういえば、もうぼくの好きな先生は転任でどこかへ行ってしまったのだった。

ぼくは美術室をちらりとだけ見て、帰る事にした。

帰る途中、iPhoneで音楽でも聞こうとポケットをまさぐったら、後輩のiPodをぼくが持っていた

。

ぼくは携帯を取り出して（iPhoneとは別にもっているらしい）後輩にメールを作成する。

「iPodをもって行ってしまったみたい、ゴメン」ここまで作って、送ろうかどうか躊躇した。

そうやって携帯をいじりながら歩いていると、もう夕方であることがわかった。

ぼくは気がついたらへんな道へと来てしまっていた。

ずっとまっすぐつづく砂利道で、車の轍がくっきり見えてしまっている。

先の方にはその轍に泥水がたまっている。道の左脇は植物だらけだ。左側の先になにがあるかよくわからない。右側には鉄の柵がぼくの身長を越えるほどのたかさで聳えていて、その先は土とちょっとした原っぱのような淋しい風景。その先には海が広がっていて、海に夕日が落ちようとしていた。さらに水平線の上にちょうど高速道路の陸橋みたいなのがシルエットになって切り絵みたいに綺麗にあって、その奥に水墨画で書いたみたいな繊細な山がちょっと見えていた。

ぼくはひたすらまっすぐのみちをあるく。ときどき水たまりがあるため、端っこによけたり、木や草が落ちているので大股であるいたりしながら。

延々と続く道の先を見ていたら、紺色のかたまりがわらわらと押し寄せてくるのがわかって、ぼくはぞっとした。小学生くらいの遠足グループだ。

そいつらがぼくのあたりまで来た。すごい数だ。信じられない。先生は若くて綺麗な女性が多かった。

通り過ぎるのを待っていると、今度は海の上の太陽と月が同時に現れていることに気がついた。近い。

ぼくは迷わず写真を撮る事にしたが、柵がどうしても写真に映ってしまう。

そうやって写真の構図を考えている間に、高速道路あたりに飛行機が墜落した。

ぼくは大急ぎでiPhoneでニュースを聞く。大韓航空の飛行機らしかった。日本人の死者は2名。

めまぐるしく場面がかわるなか、ぼくは、先ほどメールを作成途中だったことを思いだして、結局メールを送らずに、そっとiPod touchを自分のモノにしてやろうと企んだ。

